

読者へ

読者諸氏が本書の主人公に関して犯しかねない混同を未然に防ぐよう、前もって断りを入れておくのが作者の礼儀であるように思われる。

今日だれもが知っていることだが、アメリカのたいへん高名な発明家エジソン⁽¹⁾氏は、十五年このかた、珍奇かつ巧妙な数々の発明品を披露している——とりわけ〈電話〉、〈フォノグラフ⁽²⁾〉、〈微音拡大增幅器⁽³⁾〉——そして地球の表面を輝き照らすあのすばらしい電球など——ここでは触れないが、ほかにも百点ほどの驚嘆すべき品々がある。

というしだいで、アメリカとヨーロッパにおいては、大衆の想像のうちに、この偉大な合衆国市民をめぐる一つの伝説が芽生えたのだ。〈今世紀の魔術師〉とか、〈メンロー・パークの魔法使い〉とか、〈フォノグラフのパパ⁽⁴⁾〉等々の、幻想的なあだ名でもって人々が呼んでいるのは、彼のことなのだ。彼の祖国においても、他所においても、——至極当然のことだが——人々は興奮熱狂し、その結果多くの人々の精神において、彼にある種の神秘的な特性が付与された、あるいは付与されたも同然なのである。

それゆえ、この伝説中の「人物」は、——伝説が生まれる原因となつた人間の存命中であつても、——人類の文学の所有物なのではあるまいか？——別言すれば、仮にヨハンネス・ファウスト博士が、ヴォルフガング・ゲーテの同時代人で、自身の象徴的な伝説のもととなつていたとしても、『ファウスト』は、それでもなお、正当なものではなかつただろうか？

——したがつて、本作品の「エジソン」は、その性格も、住まいも、言葉も、理論も、少なくともほどほどには、現実と区別されるのであり、——また区別されるべきなのである。

このように、私が現代の伝説を、私が構想した「形而上学的芸術作品」にとつて都合の良いように解釈しているということは、明白である。一言でいえば、本書の主人公は、なによりもまず「メンロー・パークの魔法使い」等々であつて、——われわれの同時代人の技師エジソン氏ではないのである。

ヴィリエ・ド・リラダン

夢見る人に、

嘲る人に。

第一卷

エジソン氏

第一章 メンロー・パーク

その庭は美女の似姿に刈り込まれていた
横たわり、心地良さそうにまどろんで
開かれた天空に對して瞳を閉じた美女のよう
に。

天空の紺碧の野原はきちんと集められていた

光の花々で飾られた輪の中に。

アイリスとその紺碧の葉の先にぶら下がる

露の光り輝く輪の舞は
夕暮れの青みの中できらめく星々のまたきのようだつた。

—— ジャイルズ・フレッチャ(1)

ニューヨークから二十五里、電線網の中心に、人気のない奥深い庭に囲まれた一つの住居が姿をあらわす。^{ひとけ}そ
の正面には数本の砂敷の小道が横切る見事な芝生があり、そこを越えると大きな離れ家のようなものに行き着く。
南側と西側には、大変古い木々からなる二本の長い並木道があつて、その葉叢の先端は離れ家に向かつて陰を投
げかけている。これがメンロー・パーク住宅地の一番地。——ここにこだまを虜にした男、トーマス・アルヴァ
ア・エジソンが住んでいる。

エジソンは当年四十二歳。その顔立ちは、数年前には、驚くほどに、ひとりの有名なフランス人の顔立ち、す
なわちギュスター・ドレ⁽²⁾の顔立ちを思い起させた。それはほとんど、学者の顔に翻案された芸術家の顔だつ

た。同種の能力、別方面への適用。神祕的な双子である。いったい何歳頃に彼らは瓜二つだったのだろうか？おそらく、そんなことは一度もなかつたのだろう。当時の二人の写真を立体鏡スチレオスコープで溶け合わせてみると、ある知的な印象が呼び覚まされるが、この知的な印象は、たとえ由緒ある一族の某かの肖像であつても、〈人類〉の間に散らばつた肖像付きの貨幣となつて、はじめて十全に実現する類のものなのである。

エジソンの顔つきは、これを古代の版画と突き合わせてみると、アルキメデスの像が刻まれたシラクサ硬貨の、生ける複製のごとくである。

ところで、そう遠くないある秋の日の夕暮れ、五時頃に、あんなにも多くの偉業を達成した驚くべき発明家、耳の魔術師（彼は〈科学〉のベートーヴェンよろしく、耳がほとんど聴こえなかつたので、自分のために微細な器具を創作したのであるが、——おかげで、これを耳の穴に装着するや、難聴が消え失せるばかりでなく、聴覚が以前よりもずっと鋭敏になるのである——）、要するにエジソンは、彼の館の離れ家にある個人研究所の奥に引きこもつていた。

その夕べ、エジソンは五人の手下、つまり職工長たちに、暇を与えていたのだった。——この工員たちは献身的で、学識もあり、器用だったので、エジソンは王侯を遇するかのような賛待遇で迎えており、そういうわけで彼の秘密も守られているのである。さて、エジソンは、アメリカ式肘掛け椅子に腰掛け、肘をつき、ただひとり、ハバナ葉巻をくゆらせていた——煙草は雄々しい計画を夢想に変えてしまうので、彼は普段はほとんど煙草を吸わなかつたのだが、——目はじつと一点を、放心したように見つめ、足を組み、すでに伝説となつてゐる、紫色の房の付いた黒絹のゆつたりとした衣を身にまとつて、彼は深い瞑想に耽つていた。

彼の右には、西方に向かつて大きく開いた高い窓があつて、そこからこの広々とした伏魔殿に外気が入つてきており、すべての道具の上に赤みを帯びた金色の靄が広がつていた。

卓上を埋め尽くすように、あちらこちらに、様々な形状の精密器具、未知の機械装置の歯車、電気器具、望遠

鏡、反射鏡、巨大な磁石、長首フラスコ、謎の物質に満たされたフラスコ、方程式で覆われた石盤が、おぼろな姿を見せていた。

戸外では、地平線を越えて、沈みゆく太陽が、別れのきらめきと光とで、楓や櫻の茂るニュージャージーの丘の上のはるかな葉叢の連なりを刺し貫いて、ときおり、その部屋を緋色の斑紋や閃光で照らし出していた。すると、金属の角やクリスタルガラスの切子面や電池のふくらみなど、いたる所から血が流れるのだった。

風が冷たくなってきた。昼間の嵐が庭の芝生をぐつしょりと濡らしており、——窓の下の、緑色のプランターに咲いた、きつく、酔わせるような香りのアジアの花々も水に濡れていた。滑車と滑車の間で、梁に掛けられた植物標本が、気温のせいでにわかに活気づき、森林でかつて芳しい生命を宿していた頃を思い出したかのように、香気を放っていた。こうした雰囲気の染み通るような影響で、物思いに耽るエジソンの、普段は強靭で執拗な思考も——くつろいで、知らず知らず夢想と夕暮れの魅力に引き込まれていった。